

「米が立つ時」

お米と私

雲仙市立国見中学校二年

久山 豪己

キラキラした水面に、緑の苗がいつぱいに  
広がっている。祖父が一生懸命育てたお米が  
少しずつ少しずつ大きくなっていく様子を見  
るのがぼくは好きだ。朝、夕、涼しいうちに  
苗のチェックを欠かさずにする祖父のゆっく  
り田んぼを歩く様子は、祖父が一本一本苗を  
大切にしているようにみえる。

ぼくは、小学生のころ、JAの方々の指導  
により苗を育てるところから田植え稲刈りま  
でに取り組んだことがある。小さな小さな土

の上に落としたり分からなくなるような種を  
ひとつずつポットの上に入れる。ドキドキし  
て緊張したのを覚えている。それから、水を  
やり続けて、小さな苗が出た時は、みんなで  
大喜びして喜んだ。そして、ある程度田植  
えをしていい大きさまで育てるのに一カ月ほ  
どかかった。田植えは、ピンと長くひっぱら  
れた糸の線に沿って手植えをしたけど、ぬか  
るむ畑に足をつけて、みんなでワイワイ楽し  
くしたので、大変だとは思わなかったけど、

八十人ぐらいで一直線に植えていったので、早く終わった。

しかし、祖父はこねを祖母と二人で、ぼくたちや、東京にいるいとこのために、お米を作っているのだ。食べ慣れたおいしいお米をみんなに食べてもらいたいからなのだろう。

一度だけ機械がこわれたことがある、  
「おじいちゃん、今年は何機械なかったら大変やけん、お母さんにお米は買うように言ったら？。」と言ってみた。すると祖父は

「そがんことできん。この畑で育ったお米は食べんば、元気になるらん。ゴウがこのお米で大きくなる事が楽しみたい。」と言った。祖父も、一年一年年をとっていくから体力仕事は大変だしきついなと思うけどぼくの事をこんなに考えてくれていたのかととっても嬉しくなった。

台風の時期になると、苗が倒れないか気が取れないらしい。ある年は、ある程度大きくなつた苗が全部同じ方向に倒れているのを見

た事がある。でもお米は、穀から飛び出さず、  
必死にしがみついていると祖父が見せてくれ  
た。その一粒を見て今年もおいしいご飯が食  
べられるととても安心したことを覚えている。  
ぼくは、バスケットをしていて、今の  
悩みは、身長が低いことである。だから、祖  
父の大事に育てて作ったお米を毎日食べて、  
誰に当たられてもフラフラしない体作りをし  
たい。そして、お米の一粒のように、コート  
に立つ一人としてみんなを安心させたい。そ  
して、僕の体が大きくなってバスケットで活  
躍して、祖父母を安心させて喜ばせたい。祖  
父母が作ったお米で自慢できる一粒孫になっ  
てやる。